



社会人の匂い

働く女の子は臭くなる

「青葉ちゃんも大変だねえ」
「昨日から会社に泊り込みで家にも帰れてなかったのに……」
「そんな状態でこんな接待にまで駆り出されるなんて」

「そおなんですよお……色々と急な仕事が入りまして
ホントは来る予定だった八神さんもソレでどうしても抜けられないって
他の皆さんも外せない要件があるらしくってえ……」

「空いてるのが私とひふみ先輩の2人だけだったんですけれど
私たちの部署で普段接待するなんてコトないですから
社会勉強のためにも行って来きなさいって上司が……」

「ごめんねえ……」

僕があんな凄いゲームを作った人達と直接会って色々話を聞いてみたいなあ
なんてポロっと言っちゃったせいで……

「なんか周りの人間が随分と気を利かしちゃったみたいだねえ……」

「ホンマは雑誌で見た八神コウがこっつエエ女やったんで」

「発ハメたる思て呼んだんやけど……」

「まさかこんな『ちんくりんとネクラ』よこすとは思わなんだ……」

「まあ、この子はこの子で楽しめそうやから今回は赦しといたるけどなあ」

「ん？ あれ？ ていうかココどこですかあ？ ん？ ひふみ先輩はあ？」

「えっ?! ああ やっぱりだいが酔っちゃってるみたいだね」

「ここはお店にある特別休憩室だよ？」

「青葉ちゃんみたいになっちゃった人を無理矢理……ゲフンゲフン……」

「やさしく介抱するための部屋なんだ……さっきも言ったけどね……」

「ああ……そうでしたねえ……」

「ごめんね、私も部下も青葉ちゃんがまだお酒ダメなの知らなかったから……
青葉ちゃんもジュースだと思って、飲んでも気づかなかったし……」

「んっ」

「ぐでえ」

「るっ」



「そおですよお 私まだお酒ダメなんですからねえ
飲まずと怒られちゃいますよお？」

「そうだよねえ こめんねえ」

「飲んでたのはホントにジュースなんだけどね まあ少し『へんな薬』を混ぜた特製ではあるが」
「ひふみちゃんも少し酔っちゃったみたいだから
別の休憩室で休んでとこるだよ」

「部下にちゃんと優しく介抱するように言っておいたから大丈夫だと思うけど」
「だから青葉ちゃんもゆっくり休んでいきなよ」

「ああ。。。でも明日も仕事ですし早く帰らないとお。。。」

「無理しちゃだめだよ そんなフラフラじゃ帰れないでしょ？」

「もう少し落ち着いたら部下に車で送らせるからそれまで安静にしてなよ」

「は。。。は。。。ではもう少し。。。」

「まあ時間が経つほど薬が回って、よけい動けなくなるんだけどね。。。残念」
「そうだ 疲れてる青葉ちゃんのためにオジサンがマッサージしてあげよう」

「えっ？ いいですよそんな。。。悪いですし。。。気持ち。。。」

「ん？ なに？」

「いっ いえなんでも。。。」

「大丈夫 大丈夫 オジサンこれでもマッサージ師の資格を持つてるんだよ
特に疲れた女性の身体を癒すマッサージは得意中の得意なんだ」

「だから ね？」遠慮しないで」

「そ そうですか？ じゃあ お言葉に甘えて・・・」

「よし、それじゃあ服を脱ごうか」

ふふふ
もく



「えっ?! 服を脱ぐって。。。この服ですか?!」

「そうだよ、その服だよ？」

「服来たままじゃマッサージできないでしょ？」

「もしかして青葉ちゃんマッサージ受けたコトないの？」

「は。。。はあ。。。まあ。。。無いですけど。。。服って脱ぐもんなんですか。。。？」

「脱ぐモンだよっ！」

「マッサージを受ける時はみんなスッポンポンの生まれたまま太郎だよ？」

「恥ずかしいって気持ちも分かるけど、僕がやるのは素人のそれとは違って

三療師の資格を持った『先生』がやるちゃんとした施術だからね

何も恥ずかしがるコトはないんだよ？」

「むしろ何か身体について悩んでいるコトがあれば相談してくれたらいいんだけど」

「そうだ、気分的にも僕のコトを『先生』って呼んでみるのも良いかもしれないね

そうすれば多少恥ずかしさも紛れるかもしれない」

「でも、いきなりスッポンポンが恥ずかしいのも分かるから

まずはそのシャツとスカートだけでも脱いでみるってのはどうかな？」

「後は馴れてから追々ね？ ね？」



「うん……まあ良いですけど……」

（よし、へんなクスリのおかげで判断力も鈍鈍だな）

「んしょ……ん……ん……うっ？」

（ああこのシャツは少し臭うかな……今朝フアツたけどさすがにこの時期の二日目はなあ……）

「脱いだら腕を上げて手を頭の後ろで組んでみようか」

「腕……ですか？」

「そう、腕！ 腋のリンパマッサージから始めるからね

そこのマッサージすると首、肩周りの凝りが解消されて二の腕の引き締めやバストアップにも効果が期待できるんだよ？」

「なっ?! バストアップですとっ?! それはスゴイですね！是非お願いします」先生っ!!」

（喜べ青葉ちゃん おそらく今日最初で最後のホントの話だ!）

「うん じゃあ始めようか」



ふん

「こんな感じで良いですか？」

「うん イイよお！ すごくイイよお！」

「はっ 恥ずかしいです……」

「ん？ 緊張してるのかな？ 腋汗がすごいコトになってるね……」

「どうも私ってよく腋汗をかくタイプみたいで……」



しかもこの距離なのに目頭の奥にツーンと突き刺さるすっぱい刺激臭っ!! たまらんっ!!
これが三日間シャワーも浴びず会社に泊り込んで健気に働きつめた社会人一年生の体臭っ!!

「やだ……やっぱり腋ニオもちゃってるかも……どうか気付かれませんかようっ!!」

「そっ……それじゃあオジサン先生の施術を始めるね……ハアハア」

「はっ……お願いします……」

もふもふ

いいとみ

「んうっ。。。中学1年生の夏休み前くらいから。。。でした。。。
「なんか急に汗掻くようになったなあって。。。」

「特に腋と。。。足と。。。えと。。。その。。。
まっ。。。まあとりあえず。。。すぐ局地的にゲリラ豪雨のような汗を
掻くようになったっちゃったんです。。。」

「初めは夏の暑さのせいなのかなあ。。。で。。。くらいに思ってたんですけど。。。
それが秋になって。。。冬になってもおさまらなくなっ。。。」

「母の勧めで汗液パッドも使ったんですけど1枚の面積じゃカバーしきれなくて
カバーしきれなかった部分に染みが拡がって逆にパッド型の汗染みが出来ちゃったり。。。」

「みんな直接は言うて。。。なかったんですけど
影では「ワッキー」とか「染み子」とか呼ばれてたみたいです。。。」



「それに。。。特に男子は。。。というか先生も。。。」

「いや。。。それだけじゃないですね。。。今まで出会ったほぼ全ての『男性』が
授業中や休み時間、通学中の電車内。。。いつでもどこでも
真っ赤な顔と血走った目で私の腋を覗みつけてくるんです。。。」

「それが原因で虐められたとか特に何か実害があったわけじゃないんですけど。。。」

「でもずっとそんな鬼の形相で睨まれてたから。。。
やっぱり私ってキモいんだろうな。。。臭いんだろうな。。。
それで周りの人に迷惑かけてるんだろうな。。。って」

「そう思うとなんだか申し訳なくて。。。」

「それに。。。こう見えても私だって女の子ですから。。。やっぱり。。。何より恥ずかしくって。。。
まあ。。。それはもう諦めてはいますけど。。。臭いですし。。。手ピですし。。。ベチャですし。。。」

「そうか。。。青葉ちゃんも苦しんできたんだね。。。」

「そうやって青葉ちゃんを苦しめてきた腋汗が

今もどンドン溢れ出してびっちょり僕の指に絡み付いてくるよ」



「うっ……」めんない……私の汚い腋汗で先生の指を汚しちゃいましたね……」

「違うよ青葉ちゃんっ！ 青葉ちゃんは勘違いをしているっ！

青葉ちゃんの腋は汚くなんてないよ！」

「え……でも……」

「ましてや臭いなんてとんでもないっ！ いや臭いのは臭いんだけどそういうコトじゃないんだよ！」

「女の子の腋からは汗と一緒に男の子を誘惑するフェロモンも一緒に分泌されるんだよ

腋汗が多いってコトはその分だけフェロモンも大量に分泌されてたハズ」

「だから青葉ちゃんを見ていた男達は青葉ちゃんのコトが不快で睨んでいたわけじゃなくて

逆に青葉ちゃんが魅力的すぎて目が離せなくなってたんだと思うよ」

「実は男の子にモテモテだったってことなんじゃないかな」

「そんな……そうなのかなあ……でもそんなコトって……」

「男の僕が言うてるんだから間違いないよ？ 青葉ちゃんは十分すぎるほど魅力的な女の子だ」

「ホントにそうなら……嬉しいんですけど」

「うん 大丈夫だよ 自信を持って」

「は……はい……」

（にしても本当に濃いな……濃いマスの匂い……

可愛い女の子がこんな濃い雌臭を漂わせてたらそりゃあ血走った目で視姦されるわな）

（隣に座ってた男子に自分の臭い腋臭をオカズに毎日毎日○ほ掻きまくられてたんも知らんでアホな子やでw）

ビチャ
セチャ

ぐす

ふるふる

（まあ それはそうと……それより今はこっちだ）

「そりゃコレ……ずっと気になってたコレ……
まるで○学生のような幼く可愛らしい顔をした女の子の腋に……」
チヨリッ

（っ）

「燦然と輝く毛っ！ 生えかけの毛っ！ 腋毛っ!!」

「会った時は○学生かと思ったけど……」

「本当に青葉ちゃんは立派な大人だったんだねっ！」

ピカッ

「やだっ……思ったより生えてきちゃってさっ……」

「確かにこの数日は処理できなかったけど……」

「私って元々薄い方だったから、まだ大丈夫だと思ったのにつ！」

「ああー 童顔で可愛い青葉ちゃんの腋には似つかわしくないチヨリモ！
このギャップがたまらんっ！」

「ああ……これって完全に意識して触られちゃってるよね？」

「チヨリチヨリの感触がしっかり伝わっちゃってる……」

「臭いだけでもダメなのにこんな醜い毛まで見られるなんて恥ずかしくて死んじゃいそうっ！」

「それじゃあ次は横になるうか」

んっ

ズヨリッ

ツリッ

チヨリ

「次は専用のマツサージ棒を使って施術していくんだけど
その前に汗だくになっちゃった腋を一度キレイに消毒しようね」

「消毒……ですか？」

「あつ 青葉ちゃんの腋が汚いって言うてるわけじゃないよ？」

「マツサージ棒を使う前には施術部を一度キレイに消毒するっていう決まりがあるんだよ」

「面倒だけどそういう決まり事だから」

「ちゃんと守らないと僕が怒られちゃうんだよ ごめんね」

「大丈夫ですよ キレイにしてもらえるんなら むしろ望むところです」

「それじゃあ消毒開始！」

べろんちよ

「ひゃんっ！ ちょっと……舐め……えっ？ 消毒って……コじが？」

「うん 消毒だよ？」



「そんな……だとして舐めるなんて……」

「え？ でも消毒って言ったら古今東西最古の昔からこれでしょ？」

「いやっ……ちょ ちよつとまってくだ……はあんっ！」

（ああ……舐められてる……他人に腋を舐められるなんて……）

「青葉ちゃんの腋……しよっぱくて美味しいよ……」

「ニオイも汚れも腋汗ごと全部僕が責任を持ってキレイにしてあげるからね」

（汗だくで……臭くて汚れてる腋なのに……ムダ毛処理を怠ったごま塩腋なのに……
キレイにされちゃう！ 舐められて消毒されちゃう！）



べろべろ

べろべろ

あーっ

ぐわっ

「青葉ちゃんの腋汗……舐めても舐めてもどんどん溢れでくるね
ニオイも味もどんどん濃くなって……スゴイよ」

「そんなあ……それじゃいつまでたってもキレイにならないじゃないですか……」

「大丈夫 新鮮な汗は何も汚くなんてないんだよ？」

「そのままにして時間が経つと雑菌なんか繁殖して臭くなっちゃうけどね」

「新鮮な腋汗はただただ青葉ちゃんのイイ匂いしかないんだ」

「ホント……ですか？ イイ匂い？」

「そう とてもイイ匂い 可愛い女の子にしか醸し出せないとても芳しいイイ匂いだよ」

「そ……そう……ですか……」

「よし 消毒はこれくらいで十分かな」

はな

はな

ビクビク

だくだく

バク

ベロ

ビク

「それじゃあ」からはこのマッサージ棒を使っていくね「ハアハア」

「えっ?! ちよちよちよつ ちよつとそんなモノだして何をっ?!」

「何ってマッサージ棒でマッサージだよ？」

「そこら辺の極安マッサージ店でも必ずやる一般的なマッサージ方法でしょ？」

「そんなに驚いてどうしたの？」

「えっ……えええっ?! で……でもそれって……その……」



「ああ」そうか「青葉ちゃんマッサージは初めてなんだったね」

「マッサージは患者さんの身体の状態を敏感に感じ取らないといけないよね？」

「だから少しでもしっかりと感じ取れるように身体で一番敏感な部分を使うんだよ」

「テレビや雑誌の情報なんかじゃコレは知るコトはできないけどね」

「だってさすがに『コレ』の映像や画像を放送したり掲載するコトは出来ないでしょ？」

「な……なるほど……」

「青葉ちゃんみたいに初めはみんな驚いちゃうけど」

先輩社会人のお姉さん達はそれはもう馴れたもんだよ？

それが大人の世界 大人の嗜みつもんだからねえ」

「大人……ですか……ですよね？」

私ももう社会人ですもんね！ 大人ですもんね！」

「じゃあ続けても良いかな？」

「はいっ お願いしますっ！」

(へんなクスリすげえなオイ!!)

はあ

ドキドキ

4ラ
4ラ

はあ

はあ



「じゃあ始めるねえ」

「はい……んあっ……んうっ……」

「あれ？ なんだかヌルヌルしてますね……あっ……
コレ……ちよつと気持ち良い……かも……んふっ……はあん」

「先つちよから自動でマッサージ用のローションが出てくるんだよ
それに最後には抜群の美肌効果がある乳液も飛び出すから楽しみにしててね」

「そ……そんな機能までついてるとは……スゴイです！」

（おおっ……青葉ちゃんの腋汗とガマン汁が混ざって良い感じの摩擦具合に……
それにこのチヨリチヨリとした生えかけの腋毛が良い刺激になって……）

「えっ？」

（あっ……）



「せ……先生も気持ち良いんですか？」

「そ そうだね……実はこの棒でマッサージするとね

受けてる人はもちろん施術してる人も一緒に気持ち良くなるんだよ」

「おお そうでしたか！」

「お互いに気持ちよくなれるマッサージなんてステキですね！」

「そうですね？ だからみんなこのマッサージが大好きで夢中になるんだよ

青葉ちゃんも もっとリラックスしてたくさん気持ち良くなってね」

「はい……私も……もっと気持ちよくなりたい……です……んっ……はあっ」

「よし それじゃあ少し強くイクよ!?」一緒に気持ち良くなるうね！」

「は……はいっ……あんっ……」

ふぁ

んんん

フル

んんん

はあ

んん



「すっぴい！ 激しく動かすと腋毛の刺激が一段と強くなる！」

「やっぱり・・・生えてきちゃってますよね？」

「昨日は帰れなかったので数日の間処理できてなくて・・・恥ずかしいです・・・」

「恥じるコトなんてないよ むしろ感謝したいくらいだ

そのおかげでオジサンはこんなに気持ちの良い思いが出来てるんだから」

「ああ！ 青葉ちゃんの腋のおろし金でオジサンの汚肉棒の薄皮がズル剥けそうだ!!」

「お・・・おろし金・・・って痛くないんですか？」

「痛いよ！ 痛いけど・・・それが気持ち良い！ 痛気持ち良い!!」

「ありがとう青葉ちゃん!! ムダ毛の処理を怠ってくれて!! 本当にありがとう!!」

「すごく恥ずかしい・・・恥ずかしいですけど・・・良かった・・・」

私のムダ毛がムダじゃなかった!!」



「あんの……ス……の……激しいっ……とんたんのリンパが流れちゃうっ」
(……気がするっ……)

「もっ もう少しだから もう少しで乳液が噴き出してくるからねっ!!
お肌もツルツルのテカテカになっちゃう
最強の乳液を青葉ちゃんにかけてあげるからねっ!!」

「はっ……はいつ……か……かけちゃってください……」

「よおし出るよ?! 出ちゃうからね?! 乳液出しちゃうからね?!」

「お……お願いします……かけて……いっばいかけてえー」

「おう いえあ!!」



あ、あ

あ、

ん、あ、

はあ

はあ

あ、

ストロベリー

ストロベリー

「ああ……すごい……乳液がいつ……ばい……私の腋に……」

（でもこの液体って……やっぱアレ……だよな……でも……）

「このニオイ……なんだか頭がクラクラしてきます……」

「ブリブリのダメダメ乳液がいつぱい出ちゃったねえ……」

「ちよっと臭いけど効果はスゴイから我慢してね」

「ちゃんとお肌の潤いを保ってくれるように、しっかりぬりぬりしておこうね」

「これで明日には お肌もつるつるのピカピカだよ」

「うれしい……ありがとうございます……」

「これくらい塗り込んでおけば大丈夫かな……っとよし じゃあ次は足のマッサージね」

「えっ？ 足ですか？ あの痛そうなヤツですよね？ 私痛いのはちよっと……」

「大丈夫大丈夫 足ツボグリグリじゃなくて手で軽く揉み解してからまたこの棒でやさしくマッサージするだけだよ」

「ああ なら大丈夫ですね」

（大丈夫なんや……）



「青葉ちゃん 足をこっちに向けて出してくれるかな」

「はい あ……でも私足も汗つかきなので……その……多分すごく蒸れちゃって……ちよつと臭いかもしれません……」

「うん そうだね 少し臭うね」

でも大丈夫だよ 足だって腋と一緒に多少臭くたって不快なモノじゃないからね」

「そ……そうなんです……」

「やっぱり臭かったんだ……大丈夫だって言われてもやっぱ恥ずかしいなあ……」

「それにしてもホントに足汗もすごいんだね……靴下がじっとり湿ってる」

「はい……靴とか履くとすぐ汗がいちゃって蒸れちゃうんです……」

「通勤の間だけでも 絞ったら滴り落ちるんじゃないかってくらいに発汗量で……」

「会社ではスリッパに履き替えないといけないんで……」

いつも足臭いのがバレないように会社に着いたらトイレで靴下履き替えてるんですよ」

「でも今履いてるのは昨日出した時に履き替えてからずっと履きっぱなしの靴下なんで……」

「しかも今日はいつもより長い時間靴も履いてましたから……かなり臭いんじゃないかと……」



「確かに強烈なニオイだ・・・俺のような匂いフェチの変態でもない限り千年の恋も冷める卒倒レベルの激臭じゃないか・・・可哀相にw」

「それにこのニオイ・・・足汗を吸って湿った靴下の生地が蒸れて醸され・・・まるで・・・」

「温気たポップコーンみたいなニオイしませんか？」

（おっ!!）

「ウチの母がこのニオイを嗅いでからポップコーンが食べられなくなったらしくて・・・」

「美味しそうなニオイのはずなのに」

「どうしても私の足のニオイを連想しちゃうらしいです・・・」

「なんかホント申し訳なくて・・・」

あはは...

「そうか・・・会社や家じゃ少し気をつけた方が良いのかもしれないね」
「でも今日はニオイのコトなんて気にせずリラックスしてね」
「それにどんなに汚れて臭くなった足だってオジサンが責任を持ってちゃんとキレイに消毒してあげるから安心してくれて良いよ」
「は・・・はい・・・お願いします」
「じゃあまずは靴下を脱がすよ」



「やっぱりたくさん足汗をかいてるみたいだね」

「ニオイもさっきの靴下を履いてる時とは違って酸っぱさが混じったニオイに変わったよ」

「こんなに臭い足を触らせちゃって・・・申し訳ないです・・・」

「いいよいいよ そんなの気にしなくて

そんなの気にしてたらしたらマッサージ師は勤まらないからね

じゃあ 始めるよ？」

「はい・・・でもあの・・・ホントに痛くしちやダメですよ？」

「心配要らないって・・・ほら・・・こうやって・・・

指で足裏を軽く押して・・・ね？ 大丈夫でしょ？」

「あ・・・これなら大丈夫っぽいです」

「でしょ？ まずはこうやって解していくからね」

「指も開いてストレッチしようか」

「あっ・・・そこ開いちゃうと・・・すごく・・・」

「おうっ・・・指の股は特に蒸れて 開くと一段と濃いニオイが立ち上ってくるよ」

「酢飯を混ぜている時のムワツと噎せ返るような酸いニオイだ」

「もう・・・あんまり言わないでください・・・恥ずかしいです・・・」

「足汗もまったく治まる気配がないね 指で押さえるとじわつと滲み出てくる」

「コレは早く消毒した方がよい」

「やっぱりこれも・・・口で・・・ですか？」

「当然！ 馴ればコレもすごく気持ち良くなれるんだから」



「まず 足の裏を合わせて輪っかを作るようにしてごらん」

「こ。。。こうですかね？」

「そうそう そんな感じ。。。そこに僕のマッサージ棒を挟み込んで。。。っと」

「よし コレを動かして足裏をマッサージしていくんだ 青竹踏みのようなモンだね」

「なるほど そういうコトですか。。。それにしても。。。」

「すごい。。。足で挿むとドクドクと脈打ってるのが伝わってきます

「ばんばんに張って硬くて。。。コレ。。。爆発したりしませんよね？」

ドキ
ドキ

「大丈夫、しないしない 爆発はしないよ

「たまに暴発はしちゃうけどね。。。寝てる間なんか。。。」

「寝てる間に暴発ですかっ?! ううん。。。よく分かりませんが何か怖いですね。。。」

「でも、こうやって青葉ちゃんにいつぱいマッサージすれば暴発させなくて済むんだ」

「だから今日のことん青葉ちゃんをマッサージさせてもらおうからよろしくね!」

「は。。。はあ。。。お手柔らかに。。。」

「じゃあ始めるよ 青葉ちゃんはそのままじっとしててくれて良いからね」

「あ。。。はい。。。」

「足裏マッサージ開始い!」

ぎゅ

ぎゅ

ドク
ドク

ドク
ドク



「あぁっ。。。熱い。。。激しく擦れてすごく熱くなっています。。。」

「温熱効果で血行促進さ！このままどんどん動くからね
そのまま足裏でしっかり挟み込んでおいてね」

「は。。。はい。。。んっ。。。」

「どう？ それなりに気持ち良いでしょ？」

「なんででしょうか。。。少しくすぐりたいですが。。。
この感情は。。。多分気持ち良いんだと思います。。。」

「青葉ちゃんの汚御足に挿まれてオジサン汚肉棒も喜んでるよ
気持ち良くてどんどん動きも加速してしまう！」

「そ。。。そんなに擦って大丈夫なんですか？」

「うん 青葉ちゃんのねっとり油足汁が汚肉棒によく絡んで
ヌルヌルが増してるからとてもスムーズに動かせるよ」

「これならもっと激しく動かしても大丈夫そうだ
というかもう動かさずにはいられないんだ！」

「あっ。。。すごっ。。。そんなに速く動け。。。る。。。んあっ！！」



「ああ 青葉ちゃんゴメンね！ 激しく動かしすぎちゃったせいで
まだ始めて間もないのにオジサンもう乳液が出ちやいそうだよ！」
「私の足の中。。。なんかスゴイことになってますよ?!
さっきよりも もっともつと硬く大きくパンパンに張ってきてます！
本当に爆発しないんですよね?! すごく恐いんですけど大丈夫なんですよね?!」

「ああ 大丈夫だよ！ それにもうすぐ治まるからっ！ 治めるからっ！」
「見てて！ 青葉ちゃんをマッサージしてオジサンが気持ち良くなる場所！」
「気持ち良くなって乳液を噴き出すところ!! 見ててねっ!! 見ててねっ!!」
「はい。。。見てます。。。見てますから。。。少し落ち着いてください。。。」

「無理だ!! 世の中には出来るコトと出来ないコトがありますっ!!」



「そう！　ここだよここ！」

「ちよっ！　えっ?!　そんなトコまでっ?!」

「そうだよ　下腹部や脚の付け根のリンパもマッサージしないとな」

「便秘や下半身の浮腫みなんかにも効果的なんだよ?」

「嫌でしょ?　下半身デブとか」

「そ。。。それはまあ。。。そうですけど。。。でもだからって。。。」

「それじゃリンパからイクねえ。。。しよっと。。。」

「あっ　ちよっと待っ。。。ああっ!!」

（やだ。。。そんなに脚を広げられたら。。。見られちゃうよ。。。
おりものでドロドロに汚れたパンツ見られちゃうよお。。。）

（今ちよっど排卵期でおりものの量が多くなってきているのに
昨日の泊まりで替えのおりものシートを使い切っちゃったから
今は直パンで自分でもええすきそうなくらい蒸れて臭くて悲惨な状態なのに。。。）

（チッ。。。接待中に生臭いメンス臭が漂ってたんで期待したが
どうやら当たりはネクラの方だったか。。。残念。。。）
（とはいえ。。。青葉ちゃんの方もまたとんでもないヨトに。。。
ヨツチも十分に当たりのようだな）



「お腹の方も。。。っと。。。ん？ 青葉ちゃん便秘気味かな？ 少してお腹張ってるみたいだけど？」

「最近少し。。。思うようにお通じが来ないヨトがよくあります。。。」

「ああっ!! ダメっ。。。そんな下腹部を圧迫されたら。。。中に溜まってるおりものまで全部出てきちゃうよ!!」

「ん？ 下着の染みがどんどん広がってるね。。。なんか汚れも酷いみたいだし。。。もう脱いじやおうか 中のリンパもマッサージしなきゃいけないしね！」

「えっ?! ウツやだっ!! ちょっと脱がさないでくださいっ!!」

「ダメですって!! それに中のリンパってなんですか?！」

「ん？ クリトリスだよ 実はクリちゃんもリンパみたいなモンだからね クリリンパだよクリリンパ！」

「なっ?! そんなの。。。そっ。。。それってマッサージなんですか?！」

「場所が違うだけでグリグリ弄られて気持ち良くなっちゃうヨトに変わりはないでしょ?」

「で。。。でもっ!!」

「いいからいいから そいっ!!」



「ダメっ！ 見ないでください！ ううっ。。。。恥ずかしいよ。。。」

「おおっ。。。。なんとコレは。。。。可愛い顔からは想像も出来ない表面が腐ったカリフラワーのような下品でグロテスクなビラビラが憑いてるじゃないか！」

「んー オリモノの量が多いみたいだね。。。。中から溢れ出してるよ。。。。排卵期なのかな？」

「もう排卵も完了して いま青葉ちゃんの身体は赤ちやんを妊娠する為の準備が万端整った状態ってコトだね」

「そんな。。。。妊娠とか。。。。考えたコトも無かったけど。。。。そうだよな。。。。もう出来ちゃうんだよね。。。。私みたいなちんくりんな身体の子でも。。。。赤ちやんつくれちゃうんだよね。。。。」

あぁ

「それにしても青葉ちゃん。。。。めずらしいね。。。。下の毛も剃ってるなんて。。。。腋と同じで少し生えてきてるけど。。。。」

「え？ めずらしい。。。。？ でもねねっち。。。。いえ大学に進学した友人から『最近の流行で自分も含めて周りの女の子は皆ツルツルにしてる』って聞きましたよ？」

「だから。。。。ちよっと抵抗はあったんですが。。。。私もチャレンジしてみたいです。。。。けど」

「そ。。。。そうだったんだね うん良いと思うよ」

「青葉ちゃん。。。。それは多分騙されてるんだよ。。。。」

「とにかくヨコモもすぐく汚れてるからマッサージの前にしっかり消毒シニだっ！」



「やっ ちょっと 汚いですっ!! そこは本当に汚いですから!!」

「でもヨモちゃんもちゃんと消毒とチェックをしておかないと」

「青葉ちゃんみたいに若い女性でも婦人病のリスクは結構高かったりするんだよ」

「女性特有の病気をチェックするにはやっぱり」

「直接分泌物であるオリモノをじっくり舌で味わうのが一番なんだから」

「でも。。。だからって。。。」

「ほら 奥に溜まったのもちゃんと全部吸い出してあげるからね!!」

「すり下ろした山芋のように白くてドロドロでネバネバした青葉ちゃんの臭いオリモノを
僅かに開いた処女膜の隙間から全部吸い出してあげるからっ!!」

「いやあ。。。噁らないで。。。私のオリモノする音を立てて噁らないで!!」

「それに経験無いのもバシちやってる! やっぱり見てわかるんだ。。。
（なんか恥ずかしいよお。。。）」



「クリリンパもちゃんと皮を剥いて中にこびり付いた恥垢もキッチリこそぎ落としてあげるからね」

「ああん! 剥いちやダメっ! 中のはスゴク敏感なんですから! そんな直接されたら。。。ああっ!!」

「クリリンパでの絶頂快楽はストレスの解消にもなるんだよ」

「その後はリラックスイキまであるんだからこんなに良いマッサージは他には無いよね」

「ほら どう青葉ちゃん? 気持ちいい? コレ気持ちいいでしょ?」

「ううっ。。。気持ちいい。。。です。。。いいです。。。けど。。。」

「確かに気持ちはいいけど。。。これでもうマッサージどうこうって話じゃ。。。ああっ!!」

「えっ?! やだ。。。ウツ。。。なんかおしっこ出ちやいそう。。。」

ずるずるずる

ガッ

ずるずるずる

トロ

「ううっ。。。ごめんなさい。。。汚しっこ。。。出ちやいました・・・」

「謝るヨトなんてないよ オジサンが無理に出させたようなもんなんだから
大丈夫 汚しっこも老廃物だからね 出して身体もスッキリだよ
これも施術の内なんだから気にしない気にしない ね？」

「ううっ。。。はい。。。」

「じゃあスツキリしたところで、さらにマッサージ棒を使って解していこうか」

「ま。。。まだ弄られるんですか・・・」

「そうだね でも、その前に青葉ちゃんにお願いしたいコトがあるんだけどイイかな？」

「お願い？。。。なんですか？」

「青葉ちゃんにこのマッサージ棒を消毒してほしいんだ」

「えっ?! 私がですかっ?!」

「うん さすがに自分じゃできないからね」

「で でも。。。消毒って。。。それを。。。回で。。。ですよね？」

「そうだよ 僕が青葉ちゃんにしたように
その可愛いしいお回を使ってキレイに汚掃除してもらいたいんだ」

「女の子にとって とても大切な部分だからね
こっちもしっかり消毒してから施術しないと」

「いや。。。でも。。。そんな。。。」

「大丈夫 僕の言う通りにやってくれば簡単にできる汚仕事だから」

「わ。。。わかりました。。。やってみます。。。」

「よし それじゃちよっと起き上がってみようか」

「よし それじゃちよっと起き上がってみようか」



「こっち向いて膝をついて手は頭の後ろね」

「こ。。。どうですか？」

「うん そうそう」

「まだちよっとクラクラするかもしれないけど頑張ってるね」

「は。。。はい。。。頑張ります。。。」

「これから青葉ちゃんには消毒してもらおうわけだけど いくつか注意点を」

ん

「まず手では触っちゃダメ 余計なバイキンが付いちやうからね」

「あと僕の合図が出るまでお口で咥え込むのもダメ 唇も使わないように
できるだけ舌だけを使ってペロペロ消毒するんだ」

「舌だけで。。。ですね」

「そう そして最後に僕が合図したら今度は逆に先っぽをしっかりと咥え込む
それだけ 簡単でしょ？」

「んうう。。。よく分かりませんが頑張ってみます。。。」

「うん 青葉ちゃんならきつとうまく出来るよ」

ドキ
ドキ



「それじゃあマッサージ棒を出して準備するから
青葉ちゃんもお口の準備ね」

「お口の準備・・・は何をすれば？」

「大したコトじゃないよ まずお口の中でしっかり唾液を分泌させて」

「そしてその唾液をたっぷり舌に絡ませておくんだ」

「んん・・・くちゅ・・・ちゅ・・・」

んん

「良いかい？ それじゃあお口を開けて舌を出してごらん」

「ふあい・・・・・・んべえ・・・」

「うん イイねえ イイ感じにドロドロだあ」

「じゃあ そのドロドロになった舌で汚肉の棒を舐め回して消毒してくれるかな？」

「さっきも言ったとおり使って良いのは舌だけだからね？」

んべえ

ドム



「んんっ。。。べるっ。。。れる。。。れる。。。んっ。。。うっ。。。」
「こ。。。こんな感じでしようか。。。んれる。。。べちゅ。。。」
「うん そうそう イイ感じだよ その調子で続けて。。。」
「れるれるれるる。。。べるるる。。。っはあ。。。」
「舌は常に青葉ちゃんの唾液でドロドロに濡らしておくんだよ」
「こ。。。これは思った以上に疲れるかも。。。」

「オジサンの汚肉棒から出てくるマッサージローションも舌ですくい取って
青葉ちゃんの唾液としっかり絡めて一緒にペロペロしてね」
「ふあい。。。べる。。。べるん。。。ちろ。。。んれる。。。」
「ああ イイよ。。。青葉ちゃん！ オジサンの汚肉棒がどんどん消毒されていくよ！」
「このままもっともっとキレイになるまでペロペロ消毒続けるよ！」



「うっ。。。やだ。。。舐めた部分の唾が乾いて。。。すごく臭くなって来ちゃってる」
「もっと舐めないと。。。もっともっと新鮮な唾液で濡らし続けないと
このままじゃドンドン臭くなっちゃう！」

「おお 青葉ちゃん。。。そんなに必死になって消毒してくれるなんて！」

「ああん。。。そんなにビクンビクン跳ねられると。。。
狙いが定まらなくて舐められませんよお。。。」

「ごめんねえ 青葉ちゃんの消毒でオジサンのマッサージ棒が悦んじやって
もうオジサンの言うコトも聞かん棒の暴れん棒だよ！」



「あぁっ！ どんどん跳ね回っちゃってうまく舐められないよお！
いやぁ！ ピンタされちゃう！ 臭いお肉の棒でピンタされちゃうっ！！
これじゃ顔まで自分の唾で臭くなっちゃうっ！！」

「青葉ちゃんの汚顔でピンタコキ最高だよ！
そろそろだ。。そろそろだよ青葉ちゃん！」

「んんっ？」

「合図を出したらいつでも啜え込めるように心の準備をしておいてね！」

「はひい。。。んれるっ。。。べろ。。。てるてる。。。」

あ

あ

「ああイイよ青葉ちゃん！ もうすぐ殺菌されちゃうよ！
青葉ちゃんのお回でオジサンの汚れたマッサージ棒の消毒が完了しちゃうよ！
キレイキレイになっちゃうよ！」

「んっ！ んんんっ！」

「よし今だ青葉ちゃん！！ 啜えてっ！！」

「んっ?! はむんっ!!」



「よく頑張ったね青葉ちゃん 鼻から出ちやっただ分以外は ほとんど全部飲めたね」

「おかげさまでマッサージ棒もすごくキレイに消毒できたよ ありがとうね」

「い……いえ……んくっ……けほっ……けほっ……」

「咽」からんじやっただかな？ 鼻の奥も痛いんじゃない？ ……大丈夫？」

「あ……はい……それは大丈夫ですけど……」

「ん？ っっしたの？」

「あの……ヨレ……飲んじやっても平気なモノなんですか……？」

はぁ

はぁ

「当然！ 生命のパワーが詰まったオジサン特製汁だからねっ！
百利あって「害も無し！ 青汁も真っ青 栄養満点の健康飲料さ！」

「美肌効果も期待できる優れたものだから毎日飲むコトをおすすめしたいくらいだよ！」

「ぞ……そうなんですか……すごいんですね……けほっ……」

「ざあ これで準備も整ったし 青葉ちゃんのマッサージの続きだ」

はぁ

はぁ

げほん

げほん

けほ



「よし もうおっぱいも出しちゃおうね 締め付けは身体に良くないから解放してあげよう」

「あっ……ちよと……ああっ!!」

「っと……こっちは普通に可愛らしいモノがついてるんだね」

「こっちは……?」

「あ いやなんでもないよ コッチの話さ」

「じゃあマッサージ棒で青葉ちゃんのクリリンパをマッサージしていくよ
いっぱい気持ち良くしてあげるね ほら 足を開いて」

「二人で裸でこの体勢で……恥ずかしい……です……」

「それになんだか急に緊張してきました……」

あっ
あっ

ドクッ
ドクッ

「いまさら恥ずかしさも緊張も必要も無いでしょ?」

「青葉ちゃんの他人にはあまり相談できない悩みや秘密もオジサンは知ってるんだから」

「今日始めて会ったけど ある意味友達よりも近い関係になれたと思ってるんだよ」

「(ヘンなクスリの効果が薄れてきたか? まあ ここまで来ればそれはそれで良い!!)」

「そ……そうですね……そうですね」

「うん ほら 力を抜いてリラックスリラックス」

「は……はひ……」

「汚肉棒の裏スジを青葉ちゃんのお豆さんに当たるように押し付けて
「どう青葉ちゃん 気持ち良い？」

「は……はい……気持ち良い……です……あぁっ……」

「そう良かった 硬いのに軟らかい汚肉の塊りの圧力はさっきまでとはまた違った感触でしょ？
「オジサンの汚肉の棒も青葉ちゃんの腐ったピラピラとコリコリのクリリンパに刺激されて大喜びだよ」

「私も……熱くて……ヌルヌルで……気持ち……いいです……」

（腐った……???)

「そうだね 青葉ちゃんの汚汁のおかげだね」

そのまま前後に擦りつけて……と」

「青葉ちゃんの穴から出て来るいろんなモノが混じったドロドロの白濁汚汁が
汚肉と汚肉のヌルヌル摩擦で更に白く泡立って来ちゃってるよ」

「私の汚リモノ……汚汁が……こんなコトで役に立っなんて……」

「もう これだけドロドロヌルヌルなら楽勝だよね？」

「何が……ですか？」



「こ……このまま少しだけ汚肉棒を入れてみようか……ハアハア」

「えっ?! 入れるって……それってエッ……チじゃ?」

「入れるって言うってもほんの先っちょだけだから ね? 良いでしょ?! ね?! ね?!」

「ダメダメですよっ!! バレてると思いますですが私まだそういうの経験無いんですからっ!!」

「大丈夫! これはあくまでマッサージなんだから! ほらほらイクよ青葉ちゃん 力を抜いて!」

「っ!! イっ イヤっ! ちょっと待って! ダメっ! 痛いっ! 痛いっ! 痛いですっ!! 広がってます!

「裂けちゃいます! それ以上広げたら裂けちゃいますよお!」

「大丈夫! 先っちょだけだから! ほんの先っちょ入れてるだけだから!

「こんな生で入れたら病気になる! そうなゲログロ汚マ○コにズッポリ根元まで入れるわけないでしょ!」

「病気……グロ……そんな……ヒド……ああっ!」

「それにゆっくり入れれば意外と破れないんだよ 破れなければ問題無しだよノーカンだよ!」

「ダメですよっ! それ以上はホントにダメっ! もう広がりきってますから! 私の処女膜もうそれ以上伸びませんからっ!!」



ピツ!!

「あっ……」

「ひあつ!! 何っ?! 痛いっ! う……嘘っ……痛いっ! 痛いっ! 痛いです! すごく痛いですよっ?!」

「破れちゃってませんか?! 私の処女膜破れちゃってませんか?!」

「ヤブレテナイ ヤブレテナイ」

「嘘だ……ああ、破れてるっ 絶対破れてるよお……私の処女膜破れちゃってるよお!」

ビュッ

ひゅ

ひゅ

ひゅ

ひゅ

ピョ

「てか破れちゃったんならもう遠慮しなくても良いよね? 思いっきり突きまくっても問題無いってコトだよね?」

「そ……そんなわけないじゃないですか! 抜いてください! 抜いてっ!」

「そんなコト言わないでさ ここまで来たんだから最後まで楽しんで行こうよ」

「オジサンの汚ちのほマツサージで気持ち良くなって帰りなさいよ!」

「あっ……ああああっ!! いやっ! やめてえっ!」

「青葉ちゃんみたいに可愛い女の子が社会に出て油断してるとね
こうやってすぐ妊娠させられちゃうんだよ？」

「そ。。。そんな。。。そんな。。。こと。。。」

「本当ならそこに転がってるのは八神ヨウのハズだったんだけど 青葉ちゃん達は運が悪かったね」

「たち。。。え。。。じゃあ。。。もしかして。。。ひふみ先輩も。。。」

「そうだね 部下達は僕よりも性質が悪いから青葉ちゃん以上に大変なヨトになってるんじゃないかな
毎回精神的にも肉体的にも壊しちゃうからね 加減を知らないんだよ パカだから」

「アイツらの相手をした女の子で社会復帰出来た子は1人もいないと聞いてるよ」

「まあ青葉ちゃんも良い社会勉強になったんじゃないかな？ これからは気を付けなね」

「とは言っても青葉ちゃんにも『これから』なんて無いんだけどね」

「。。。って。。。どういう。。。？」

ピッ ピッ

「どうだそっちは？ そうか ならそろそろ交代といこうじゃないか？

ああ こっちはもう十分に堪能した 悪くはなかったが次があるほど上等でもなかったよ」

「そうだ ああ こっちも君達の好きなように好きなだけ楽しむと良い

私はデザート代わりにそっちの動かぬ肉塊オナホで一発抜いて終わりにするよ」

ピッ

「まあ そういうことだ青葉ちゃん まだまだこれからたっぷり可愛がってもらえるよ」

「そ。。。そんな。。。イヤ。。。イヤ。。。」

「残り短い社会人生活楽しんでってね じゃあね」

「イヤああああっ!!」

完